

航空機部品 リサイクル

燕三条の研究会、全日空系と提携

記念品に加工し販売

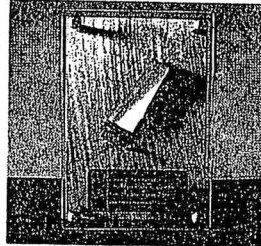
燕三条地域の企業約30社で組織する「燕三条航空機産業参入研究会」は、全日本空輸グループのANA総合研究所(東京・港)と提携し、航空機部品のリサイクル事業に乗り出す。廃棄部品をオブジェなどに加工し、記念品として来年1月下旬から発売する。全日空にとっては、廃棄処分していた部品を新たな収入源にできるメリットがある。同研究会は今回の提携を航空関連産業への参入の足がかりとしたい考えだ。

航空機部品の定期交換などで出る廃棄部品を、同研究会の参加企業がオブジェなどに加工し、羽田空港にある全日空の機体メンテナンスセンターを訪れる見学者に記念品として発売する。第1弾として、アクリル製の窓材に発光ダイオード(LED)で光を当てて幻想的な明かりを演出するオブジェとエンジンのタービンブレードを窓材や木の板と組み合わせた記念スタンドを1月下旬に発売する。

県内勢の航空関連産業参入を巡る動き

2009年1月	燕三条地域の約30社が燕三条航空機産業参入研究会を発足 新潟県工業技術総合研究所が航空機向け樹料の開発プロジェクトを県内企業と始動
10年4月	上越市や長岡市などの7社が航空宇宙産業研究会を発足
7月	新潟市が世界最大級の航空機関連展示会「ファンボロー国際航空ショー」に出展

航空機エンジンのタービンブレードを使った記念スタンド



林製作所(新潟市)がかわった。各商品には使われた部品について説明した刻印があり、航空機マニアには垂ぜんの記念品となりそう。機体メンテナンスセンターにある売店で、年間約4万人の見学者を対象に販売する。価格はまだ決まっていないが1万〜2万円を想定する。

さらに新商品の開発も進行中で来年中に5種類17品目まで増やす予定だ。年間3000万〜5000万円の売り上げを目指す。

全日空にとっては航空機部品を捨てずに有効活用しているとPRできるほか、見学者の受け入れ費用などをまかなう収入源にもなる。

同研究会は航空機産業への参入を目指して、2009年1月に設立された。調査研究を進めるうちに、航空機メーカーの

下請けとして参入するに備品など関連産業に食いつくすことを目指している。まずは航空機や空港